

ダニエルの書 - 第二百二十四号

ダニエル書11章40節を解き明かす——歴史的類似と将来の出来事に関する
預言的考察

Jeff Pippenger

2024-03-08

40節を扱うにあたり、私たちはダニエル書11章の構造を示すことに時間を割いている。40節は、預言的な意味でダニエル書8章14節と並行している。すなわち、ユダ族の獅子であるキリストが1798年に封印を解いた光がダニエル書8章14節に基づいていたのと同様に、彼が1989年に封印を解いた光も40節に基づいていたからである。

以前の記事で指摘はしたものの実際には扱っていなかったが、「line upon line」という後の雨の方法論を用いると、四十節は二つの明確に区別された筋を提示しており、そこには第一の天使の運動と第三の天使の運動の双方にとっての終わりの時が含まれている。

十一章四十節における1798年の「終わりの時」と、同節における1989年の「終わりの時」を結び合わせて考えると、ダニエル書八章十四節がダニエル書十一章四十節と一致していることが分かる。というのも、どちらも、黙示録十四章の三人の天使の預言的歴史において封印が解かれる知識を表しているからである。さらに、十四節がキリストの神殿への突然の「出現」に関する「mareh」の幻であり、四十節が預言的歴史の二千五百二十年に関する「chazon」の幻であるという事実によっても、両者は結び付けられている。一方は時点であり、他方は期間である。

一方は神殿の回復と清めを表し、他方は神殿の破壊と踏みにじりを表す。一方は二千三百年を表し、他方は二千五百二十年を表す。一方はウライ川によって表され、他方はヒデケル川によって表される。一方は人類を、他方は神性を表す。正しく理解すれば、14節と関連づけた40節は驚くほど深遠である。1798年は神的な働きを表し、1989年は人類の反逆を表す。

前の記事で私たちは、北の王が三つの障害を征服するという描写は順序立てて示されているが、描かれた出来事の実際的な適用にあたっては慎重さが求められることを確認した。というのも、42節から44節までは、実際には41節、すなわちアメリカ合衆国で間もなく施行される日曜法と整合しているからである。そこで三者連合が成就し、また「東」と「北」からの大声の叫びのメッセージが始まるのである。

ダニエル書11章において、アドベンチストの研究者たちは長年にわたり、ダニエルがローマを描写する際に特定の手法を用いていることを認めてきた。ユライア・スミスは『ダニエル書と黙示録』の中でそれに言及している。ダニエルはまず、ローマがどのようにして世界を支配するかを示し、次の節では歴史の初めにさかのぼって政治的征服の過程を描き、その同じ歴史の期間においてローマが神の民とどのように関わるかを明らかにする。最後に、ローマがどのようにして終局に至るかを示す。ダニエルが用いるこの原則は「繰り返しと拡大」と呼ばれる。

この三段階の手法は四十節から四十五節に示されている。四十節から四十三節では、現代ローマが地球全体を掌握する三段階の過程が示され、続く四十四節では、ダニエルが四十一節にさかのぼり、そのとき十四万四千人の旗印によって「知らせ」が告げられ、教皇権が激しい憤りをもって出て行き、多くの者を徹底的に滅ぼそうとするさまが描かれる。さらに四十五節と十二章一節では、人類の猶予期間が閉じられるとき、海と栄光ある聖なる山との間で、助ける者もなく教皇権がその終わりに至る。

ダニエル書11章30節では、ホワイト姉妹が36節まで逐語的に引用し、その後に「これらの節に記されているのと類似した場面が起こるであろう」と記している歴史の始まりを見出す。30節と31節は、異教ローマから教皇ローマへの歴史的移行を、それぞれ聖書の預言における第四と第五の王国として特定している。31節は、538年に教皇ローマが地上の王座に据えられた経緯を表す歴史を記している。

第31節では、最初に挙げられているのは、フランク人（現代のフランス）の王クロヴィスが496年に教皇権を支持して立ち上がったときである。続いてクロヴィスは、あからさまな異教から、妻クロティルダの宗教であるカトリックの隠れた異教へと改宗した。彼は自らの王位を、教皇権を地上の王座へと高めることに捧げた。その節ではクロヴィスは「腕」として表現されている。彼は軍事力という腕と財力という腕を、彼がそのとき着手した事業のために捧げたからである。

クロヴィスの初期の働きは、歴史の進展に伴いローマの淫婦をさまざまな形で支える運命にあった、かつて異教徒であったヨーロッパの諸王たちの働き全体を体現していた。クロヴィス、そしてその後のフランスは、カトリック教会から「カトリック教会の長子」および「カトリック教会の長女」の称号を与えられ、塗油を受けた。彼は、ツロの淫婦と姦淫を行う多くの王たちの最初の者を象徴する存在だった。

この預言的な意味において、クロヴィスはアハブによって象徴されていた。アハブは（ヨハネの黙示録におけるカトリック教会の象徴である）イゼベルと姦淫を行った者であり、また、クロヴィスが異教ローマの十の角（ダニエル書第七章参照）の第一の象徴となったのと同様に、十部族の第一の王でもあった。ヨーロッパの諸王は、ついにはバビロンの大淫婦を地上の王座に据えることになるだろう。この意味で、アハブもクロヴィスとともに、終末において教皇制と姦淫するアメリカ合衆国を表している。

ロナルド・レーガンは姦淫を始めた。そして彼は、国連のほかの九人の王たちにも同じ行為を行うよう強いる最後の大統領となるだろう。1989年の終わりの時にはレーガンが大統領であり、したがって彼は、他の九人の王たちが同じ行為を成し遂げる歴史上の最後の大統領を預言的に表していなければならない。というのも、イエスは常に物事の終わりをその始まりで示されるからである。レーガンは裕福で著名なメディアの人物であり、独特の話しぶりで広く知られ、当初は民主党に所属していたが、最終的に共和党へ転じた。

31節では、教皇権を支持する軍勢が力の聖所を汚すことになる。預言的には、異教ローマと教皇ローマの双方にとっての力の聖所はローマ市であった。これは、両者が一定期間ローマ市から統治し、そしてローマ市から統治していた間は実質的に無敵であったという事実に基づいている。

異教ローマは、紀元前31年のアクティウムの海戦において、その後360年に及ぶ支配を開始した。ダニエル書11章24節は、彼らが『時』のあいだ、自らの堅固な拠点であるローマの都からその計略をめぐらすことを示している。預言的な『時』は360年を意味し、アントニウスとクレオパトラが敗北したアクティウムの海戦から360年後、コンスタンティヌスはローマの都を離れてコンスタンティノーブルへ移り、異教ローマの無敵の時代は終わった。

教皇ローマにとっての第三の地理的障害（ゴート族）が538年にローマ市から駆逐されたとき、教皇ローマの至上権による1260年の支配が始まり、1798年まで続いた。そのとき教皇はローマ市から連れ去られ、こうして教皇権の獣に預言された致命的な傷が与えられた。そして翌年の1799年、その教皇（獣に乗っていた女）は囚われの身のまま死んだ。

教皇制の側に立った軍勢（クロヴィス）は力の聖所を汚すことになっており、コンスタンティヌスは、ローマの都をコンスタンティノーブルより劣る都市だと思想的に位置づけることによって、その働きを始めた。その後の歴史において、ローマの敵が行った戦争は常にローマの都への攻撃に焦点を合わせ、476年までに、その都を統治する真のローマ人の後裔はもはや存在しなくなった。その後538年になると、その都は教皇ローマにとっての力の聖所となった。

アハブ、クロヴィス、そしてフランスはアメリカ合衆国を予表しており、アメリカ合衆国の力の聖所はアメリカ合衆国憲法である。その文書は神聖な文書であり、預言的歴史の道標である。1989年に至る歴史の中でロナルド・レーガンが教皇権を擁護して以来、憲法は、異教ローマの衰亡と崩壊の際に力の聖所がそうであったように、絶え間なく激しさを増す攻撃にさらされてきた。まもなくアメリカ合衆国において日曜法が施行される時、憲法は完全に覆される。レーガンの時代からその日曜法に至るまで、西暦330年から538年までの歴史が繰り返される。538年に教皇権は玉座に据えられ、それによって、その日曜法における致命的な傷の癒しを予表した。

ロナルド・レーガンから日曜法に至る期間は、神の預言の言葉によって明確に特定されている預言的な時期である。クロヴィスによって代表される「軍勢」は、かつて異教の王国であったローマ帝国からも「the daily」を取り去るはずであった。帝国の宗教は当初から異教であり、クロヴィスは、公然たる異教の宗教を、単に異教に衣を着せただけのカトリックの宗教へと置き換える働きを始めた。

アメリカ合衆国は、まもなく到来する日曜法において教皇の権威の印を強制するとき、プロテスタント主義を完全に廃することになる。なぜなら、「プロテスタント」という語の唯一の定義は、ローマに抗議することにほかならないからである。ローマの権威の印を受け入れるなら、あなたはローマに抗議していない。アモス書3章3節で、アモスは修辭的な問いを投げかけている。「二人は、同意しないで一緒に歩けるだろうか？」

アメリカ合衆国で、教会の制度や慣行に国家の支持を確保しようと現在進行している運動において、プロテスタントは教皇派の後を追っている。いやそれどころか、彼らは、旧世界で失った至上権をプロテスタントのアメリカにおいて教皇権が回復するための扉を開いている。『The Great Controversy』573頁

508年に異教が国教の座から退けられたとき、それは、アメリカ合衆国で間もなく施行される日曜法において罪の人が現れるに先立ち、パウロがテサロニケ人への第二の手紙第2章で述べている抑えるものを取り除かれていたことを象徴していた。公然たる異教の宗教が、カトリックという隠れた異教の宗教へと移行しつつ服従させられていくことは即座には起こらず、その始まりは496年のクロヴィスのカトリックへの改宗とされ、508年までに完全に成し遂げられたと歴史は記している。

こうして、1989年に始まるレーガン時代から、まもなく制定される日曜法に至るまで、アメリカ合衆国では真のプロテスタント主義が完全に抑え込まれるだろう。そのとき、アメリカ合衆国にとっての「力の聖所」である憲法は覆され、三十一節の「腕」の第四の働きが成就する。すなわち、その「腕」が538年のときと同様に、教皇権を地上の王座に据えるのである。

538年に教皇権が権力の座に就くと、ダニエル書の叙述は、教皇権がいかに世界を掌握したかという説明から、その歴史の中で教皇権が神の民をどのように迫害したかという主題へと切り替わる。ダニエル書10章14節で、ガブリエルは、これから示そうとする幻の目的は「終わりの日に神の民に何が起こるか」を明らかにすることだとダニエルに告げていた。

今、私は、後の日にあなたの民に何が起こるかをあなたに悟らせるために来た。というのも、この幻はなお多くの日の後のことに関わるからである。ダニエル書 10:14

第32節から第36節は、シスター・ホワイトが直接、繰り返されると述べている節であり、それらの節は、538年に教皇権が王座に据えられてから1798年に致命的な傷を受けるまでの、1260年にわたる教皇権の支配下での迫害を描写している。

契約に逆らって悪を行う者たちを、彼は甘言で墮落させる。しかし、自分の神を知る民は強くなり、偉業を成し遂げる。民のうちの悟りある者たちは多くの人々を教える。だが彼らは、剣と火、捕囚と略奪によって、多くの日のあいだ倒れる。彼らが倒れるときには、わずかな助けを受ける。しかし多くの者が、へつらって彼らに取り入る。また、悟りある者のうちの幾人かは倒れる。彼らを試し、清め、白くするためであり、終わりの時に至るまでそうである。定められた時がまだ先にあるからだ。やがて、その王は自分の思うままに振る舞い、すべての神々の上に自らを高め、神々の神に逆らって驚くべきことばを語り、憤りが成就するまで栄える。定められたことは必ず行われるからである。ダニエル書 11:32-36

これらの節は暗黒時代の迫害を描写しており、続く三十六節は、イスラエル北王国に対する神の最初の憤りが1798年に成就するまで、教皇権が栄えることを示している。ダニエルはまず、教皇権がどのようにして地上の王座に据えられたかを示し、次に教皇権が神の民とどのように関わったかを示し、そして最後に教皇権の最終的な没落を示した。ダニエル書11章40節から43節は、教皇権がどのように世界を掌握するかを示し、続く44節は、教皇権が終末の神の民をどのように迫害するかを示し、そして45節は、教皇権が助けられる者もなく最期を迎えることを示している。

ヘブライ語の「真理」という語は、素晴らしい言語学者がヘブライ文字の第1文字、第13文字、そして最後の文字を組み合わせて作ったものである。13は反逆の象徴であり、最初

のものは最後のものを表す。

三十一節は、異教ローマの終焉を聖書の預言における第四の王国として描写し、三十六節は、教皇ローマの終焉を聖書の預言における第五の王国として明らかにしている。ローマの没落に関する最初の記述と最後の記述のあいだには背教があり、それは、始まりから終わりに至るその間の歴史において、教皇制が神の民を何百万人も殺害したことによって表されている。これらの節の適用には「真理」の印がある。

30節から36節によって例証されている40節から45節は、教皇権の没落で始まり、教皇権の没落で終わる。1798年に始まり恵みの時の終わりに至る歴史の途中には、現代ローマの反逆があり、現代ローマは再び神の民を殺害する。これらの節の適用もまた「真理」の印を運び、互いに一致して「真理」を確立する二人の証人を提供しており、両方の系列はローマを描いているが、そのローマこそが「幻を確立する」象徴である。

また、そのころには多くの者が南の王に逆らって立ち上がる。さらに、あなたの民の略奪者たちも、幻を成就させようとして高ぶる。しかし、彼らは倒れる。ダニエル 11:14.

ダニエル書11章でダニエルが用いている預言的な手法は、30節から36節および40節から45節に限られない。14節から19節では、異教ローマがどのようにして世界の支配権を握ったかが示され、20節から24節では、異教ローマが神の民にどのように対処したかが示され、そして24節から30節では、異教ローマの没落が述べられている。

14節は異教ローマの始まりであり、30節は異教ローマの終わりである。中間部で描かれている歴史において、異教ローマはキリストを十字架につけた者として示されている。ゆえに、その中間部の反逆が、これらの節が「真理」であることを指し示している。アルファでありオメガである方は、ダニエル書11章全体にわたってご自身の署名を記された。

第40節は、ロナルド・レーガンの時代に始まる歴史を含み、アメリカ合衆国大統領と「罪の人」との間に結ばれた同盟を明らかにしている。それは、538年のときと同様に、教皇権が地上の王座に据えられることで終わる特定の期間を示している。現代のフランスにあたるフランク人（の王）クロヴィスがアメリカ合衆国の象徴であることは偶然ではない。クロヴィスはレーガンを象徴していた。レーガンがプロテスタントを象徴していたのと同様に、クロヴィスは異教を象徴していた。

フランク人の王クロヴィスがカトリックに改宗するきっかけとなった戦いは、トルビアクの戦い（チュルピヒの戦い、またはケルンの戦いとしても知られる）である。この戦いは496年に起こった。当時クロヴィスは異教徒だったが、戦況が敗北の危機にあると見えたとき、カトリック教徒である妻の信じるキリスト教の神に助けを求めて祈り、もし勝利できたならキリスト教に改宗すると誓いを立てた。クロヴィスは実際に戦いに勝利し、その結果、彼自身と多くのフランク人の戦士たちがカトリックに改宗し、これはフランク人のキリスト教化における重要な出来事となった。

プロテスタントであることを公言していたロナルド・レーガンは、ローマ教皇と秘密同盟を結んだ動機は、ソ連こそ聖書の預言にある反キリストだと確信していたからだと明らかにした。旧ソ連との戦いにおいて、反キリストが誰であるかについての自らの誤解に

気づかないまま、彼は反キリストと手を組んだ。

「言葉についての理解が混乱し、反キリストの意味を見抜けない者は、必ずや自らを反キリストの側に置くことになる。」 クレス・コレクション、105.

アメリカ合衆国は、地の獣の二本の角によって表されているように、二重の預言的象徴である。フランスもまた、黙示録十一章でソドムとエジプトとして表されているように、二重の預言的象徴である。フランスは教皇権の長子であり、アメリカ合衆国を代表するレーガンは、1798年以来忘れられていたツロの淫婦と姦淫を行った、終わりの時代の黙示録十七章の十人の王のうち最初の者であった。彼女は1798年の終わりの時に忘れられたが、1989年の終わりの時に思い出され始める。

フランスの指導者クロヴィスは、538年に教皇権が王座に据えられることへと至る時代の始まりを画し、同年のオルレアン公会議で教皇権は日曜法を制定した。アメリカ合衆国の指導者レーガンは、間もなく到来する日曜法において教皇権が地上の王座に再び据えられることへと導く時代の始まりを画した。

フランスは、538年に教皇権を権力の座に就けた二重の勢力であり、またフランスは、ナポレオンの将軍ベルティエを通して1798年に教皇権を玉座から引き降ろした。アメリカ合衆国は終末の時代に教皇権を玉座に据え、十人の王の筆頭として、最終的に「彼女を荒れ果てさせ、裸にし、その肉を食らい、火で焼き尽くす」とするだろう。

第40節には第31節の歴史が含まれており、教皇権を地上の王座に戻す働きが、ロナルド・レーガンに始まり、アメリカ合衆国の最後の大統領で終わる期間によって表されていることを示している。その最後の大統領はレーガンによって型示される。なぜなら、イエスはいつも初めによって終わりを示されるからである。

ダニエル書11章の冒頭の節（第2節）では、その預言的な歴史が示されており、そこにはギリシャの王国の歴史に先立つ歴史が記されている。ギリシャは、国連および黙示録第17章に描かれた十人の王による世界統一政府の象徴である。ダニエル書11章第3節はアレクサンドロス大王を紹介し、第2節は終わりの時代の世界統一政府に先行する歴史を表している。

一節では、ガブリエルは、メディアとペルシャの王国の初めに自分がダレイオスを強めたことを簡潔に述べている。しかし、ガブリエルがダニエルのもとに来たのは第十章であり、そのとき統治していたのはメディア人のダレイオスではなく、ペルシャ人のキュロスであった。メディアとペルシャから成る預言的な二重の王国としてその王国を明確に結び付け（フランスとアメリカ合衆国がそうであるように）、そのうえでガブリエルはアレクサンドロス大王の世界帝国に先立つ歴史を紹介する。

今、あなたに真理を示そう。見よ、なおペルシャには三人の王が起こり、第四の者は彼らすべてよりはるかに富む者となる。彼はその富による力をもって、すべての者をギリシアの国に敵対するよう奮い立たせるであろう。ダニエル書 11:2

アルファとオメガは常に、ある事柄の終わりをその始まりとともに示し、そして2節は、アレクサンドロス大王のギリシャ王国によって表されているように、世界統一政府の樹

立に先立つ歴史について語っている。2節は、メディアとペルシャの二重の権力およびフランスに象徴される、終末における二本の角を持つ権力としてのアメリカ合衆国に関する預言の一節である。その節は、竜・獣・偽預言者という三者から成る世界統一政府に先立って立ち現れる、終末のアメリカ合衆国の大統領たちを象徴する王たちを指し示している。クロヴィスは、反キリストを王座に戻すことへと至る歴史の始まりにおいて、最初の大統領であるレーガンに対応している。

ダニエル書第十一章によれば、キュロスの時代から、三人の大統領が現れ、その後に四人目が続き、その者は彼ら全員よりはるかに富んでいるだろう。ダリウスはメディア・ペルシャ帝国の最初の王であり、ダニエルがガブリエルから歴史を受け取ったときに統治していたキュロスは第二の王であった。キュロスに続いて四人の王が現れるだろう。したがって、その後に続く王のうち四人目は第六の王となる。

第六の王は最も裕福な王となり、その裕福な大統領（王）はギリシャの国に対して皆を奮い立たせるだろう。レーガン以降の大統領は、ブッシュ（父）、クリントン、ブッシュ（子）、オバマである。したがって、第六で最も裕福な王はトランプとなる。その王（大統領）はギリシャの国（グローバリスト）を「stir up」するだろう。ヘブライ語の句「stir up」の定義は非常に示唆に富んでいる。

その節で「stir up」と訳されているヘブライ語の語は、「目覚めさせる」あるいは「起こす」を意味する原初的な語根である。キュロスの後の第四の支配者に象徴される歴史においては、他のいかなる大統領よりもはるかに裕福な大統領が立てられ、彼の力と権勢によって、ギリシャに対抗する「覚醒」が引き起こされるだろう。グローバリズム、進歩主義、そして「ウオーク主義」の象徴であるギリシャは、第六代にして最も裕福な大統領の時代の歴史において脚光を浴びることになるだろう。彼は、全世界を、進歩的な「ウオーク主義」と世界的支配をめぐる論争へと目覚めさせるだろう。

最も裕福な大統領の在任中にもたらされる、進歩的な「ウオーク主義」という運動への目覚めは、プロテスタントの角において十人の乙女が目覚めが起こるまさにその時に、共和党の角において起こる。

次の記事で、ダニエル書11章40節の学びを続けます。

信仰と敬虔が広く衰退しているにもかかわらず、これらの教会にはキリストの真の信徒がいる。神の裁きが地上に最終的に臨む前に、主の民の間には、使徒時代以来目にしたことのない初期の敬虔さの復興が起こるだろう。神の御霊と御力がその子らの上に注がれる。その時、この世への愛が神とその御言葉への愛に取って代わってしまった教会から、多くの者が離れるようになる。主の再臨に備えるためにこの時神が宣べ伝えさせておられるその大いなる真理を、聖職者も平信徒も多くが喜んで受け入れるだろう。魂の敵はこの働きを妨げたいと望み、そのような運動の時が来る前に、偽物を持ち込んでそれを阻止しようとする。彼がその欺きの力のもとに置くことのできる教会では、神の特別な祝福が注がれているかのように見せかけ、大いなる宗教的熱心が現れているように見えるだろう。実際には別の霊の働きであるのに、神が自分たちのために驚くべき御業をなしておられるのだと大勢の人々は歓喜する。宗教の装いで、サタンはキリスト教界への影響力を広げようとするだろう。 The Great

Controversy, 464.